

防災・環境グループ

防災・環境グループの提案を始めます。

私たちのグループは、防災や食品ロス削減、鳥獣被害対策について話し合いました。このことについて、3つの提案をしたいと思います。

提案1 「災害が起きても死者数「0」の広島県の実現」について

一つ目の提案は、災害が起きても死者数「0」の広島県の実現についてです。

以前、私が住んでいる地域で大雨が降って避難指示が出ても、「大丈夫」「避難しなくていい」と言って避難する人が少なかったという話を聞きました。

「令和7年度 防災・減災に関する県民意識調査」によれば、災害リスク情報の入手ツールを確保している人は84.3%と高い一方で、マイタイムラインを作成している人は25.1%でした。情報を得る準備は出来ていても、防災を自分事として考え、実際の備えまでできていない人も多いのではないかと思います。

だからこそ、まずは防災について知り、自分事として考えるきっかけが必要だと思います。

そこで提案です。楽しみながら防災について学べる防災ゲームを作ってはどうか。ゲームのなかで、避難経路や避難場所を確認し、防災バックの荷造りなどについても知ることができ、そのままマイタイムラインの作成ができるようにすれば、自然と防災の知識を身につけることができると思います。

そして、みんなが防災について考え、備えることができれば、いざという時に、避難する人も増えて、被害を減らすことができると思います。

また、災害が起こった時に被害の状況を早く知ることや、避難ができなかった人を助けることはとても重要だと思います。

しかし、災害があった場所には、土砂崩れやがけ崩れなどの危険な場所がたくさんあり、人がすぐに見に行くのは難しいことがあります。

そのため、離れたところから被害の状況がわかれば、救助や支援もすぐに始めることができ、命を守ることにつながると思います。

そこで提案です。災害が起こったときに、ドローンやAI技術をさらに活用してはどうでしょうか。

広島県では、ドローンを活用した物資輸送の訓練を実施していますが、そのほかにも例えば、ドローンで被害の場所を調べたり、将来的には通信設備を搭載したドローンの活用も期待します。

AIは災害の被害予測や、最適な避難経路を示すことができ、被害を減らすことができます。

私たちも、避難場所や避難経路の確認をして、マイタイムラインを作り、防災に取り組みたいです。そして、災害が起きても死者数「0」の広島県が実現できたらいいなと思います。

答弁（知事）

まず、1つ目のご提案である防災について学べる防災ゲームの作成についてお答えします。

広島県は、これまで平成26年広島土砂災害や平成30年7月豪雨災害など、大きな災害に見舞われ、多くの県民の皆様の命が失われました。

災害から命を守るためには、県民の皆様の防災意識を向上させ、いざという時には、自らの判断に基づき、適切な行動をとれるようにすることが重要です。

このため、広島県では、令和3年度から、小学校等を対象に防災出前講座を実施し、防災教育を進めています。

この防災出前講座では、今回提案していただいた防災ゲームのように、楽しみながら防災について学び、自分事として考えるきっかけとなるよう、非常持出品袋を作るゲーム形式の講座やVRにより災害を疑似体験できる講座など、様々な工夫をしています。

今後とも、多くの県民の皆様が防災意識を高め、自然災害の危険が迫った際に、主体的に判断し、適切な行動をとることができるよう、楽しみながら防災を学ぶ工夫をした講座の充実など、効果的な防災教育に取り組んでいきます。

次に、2つ目のご提案である災害が起こったときの、ドローンやAI技術の活用についてお答えします。

災害が起こった時には、速やかに被害状況を把握して、被災者の救助活動やその後の支援などに繋げていくことが重要であると考えています。

このため、広島県では、これまでも、ドローンやAI技術を活用して被害状況を把握する取組を進めています。

ドローンの活用については、土砂災害が発生した後の現地調査などにおいて、災害発生後の危険な現場に人が立ち入らずに、上空から詳細な現地の状況を確認しており、今後も、ドローンを有効に活用して、安全で効率的な現地調査に取り組んでいきます。

A I 技術の活用については、広島県の防災情報システムにおいて、SNSの情報を、A I 技術を用いて解析し、被害状況をリアルタイムで地図上に表示するなど、迅速・的確な情報共有や災害対応に繋がっているところです。

また、広島県では、県民の皆様は災害に備えていただくため、土砂災害危険区域や雨量・河川水位・カメラ映像などの様々な情報をホームページで公開していますが、今後、A I などの技術が更に進展すれば、これらの情報を解析することによって、被害予測や最適な避難経路等を迅速に把握できるようになることも期待できます。

引き続き、災害死ゼロの実現に向けて、ドローンを効果的に活用することやA I 技術の進展をいち早く取り入れることなどにより、災害対応力の強化に取り組んでいきます。

提案2 「食品ロスの削減」について

二つ目の提案は、「食品ロスの削減」についてです。

私は以前テレビで「台風などの影響で、野菜や果物が味は変わらないのに見た目が悪いと規格外品となり、売り物にならなくなる」と聞いて「もったいない」と思いました。

全国の野菜の出荷量について調べると、令和6年度は、収穫量全体の約13%は市場に出ていないことがわかりました。この中には、見た目などが理由で規格外となり出荷されなかった野菜も含まれています。

この規格外野菜が廃棄されることは食品ロスの原因のひとつです。食品ロスはもったいないだけでなく、環境にもよくありません。

そこで提案です。規格外野菜や果物を使った加工品を企業と協力して作ってみてはどうでしょうか。

例えば、長期保存可能で、栄養も凝縮される乾燥野菜やドライフルーツ、野菜や果物の粉末を使用して作るクレヨンなどは人気があるのではないのでしょうか。そしてその加工品を知ってもらうためにポスターやSNSなどで宣伝をしたらいいと思います。

このような取組で、廃棄されてしまう野菜や果物が減ったら生産者さんもうれしいと思います。さらに、食品ロスも減らせて「もったいない」が少なくなっていけばいいなと思います。

答弁（農林水産局長）

本来食べることができるにもかかわらず、販売先の基準に合わないために捨てられてしまう規格外農産物を減らしていくことは、資源を無駄にせず、環境負荷を低減するだけでなく、農業者の所得向上にもつながることから重要な取組であり、食材そのものとしての活用や、提案にいただきました加工品の材料としての活用が必要であると考えています。

このため、食材そのものを活用する取組としましては、品質には問題がないのに販売できない食品をフードバンクや子ども食堂へ提供を促すため、農業者に対して、ホームページなどを通じて、提供先の所在地や連絡先を周知し、マッチングを図っています。

一方、加工品の材料としての活用に向けましては、「とれたて」「できたて」の味を実現する急速冷凍技術を活用し、規格外の農水産物を使ったスープブランドの展開、規格外レモンを「怪獣レモン」というネーミングでブランド化し、「怪獣レモン」シリーズの菓子や飲料品の商品開発、トマトや梨の生産者が県内の食品企業のノウハウを活用して、形の悪い不揃いの農産物を使用したオリジナル調味料を開発など、生産者と企業が連携した取組を支援しています。

また、これらの取組については、メディアを通じ、その成果の発信を行うほか、WEBを活用して開発に至るストーリーを発信するなど、多くの方に興味をもっていただくことにより、販売促進につなげています。

今後とも、フードバンクや子ども食堂の運営者、食品企業の協力を得ながら、規格外農産物の有効活用を進め、食品ロスの削減に取り組んでいきます。

提案3 「鳥獣被害対策」について

三つ目の提案は、「鳥獣被害対策」についてです。

以前、児童クラブの帰りにサルが4本の電線を歩いているのを見ました。襲われるのではないかと私はとてもこわくて、ぞわぞわしました。

サルだけでなくイノシシなども農地に出没し、作物を荒らすなどの被害がでて問題

となっています。

鳥獣被害対策について調べると、手入れされていない里山は動物の隠れ場所となり人里へ降りてきやすくなるため、山際の木を伐採し、森の見通しをよくし、「バッファゾーン」を整備することが効果的だと知りました。また、一度整備した後も、計画的に手入れし、維持することが大切です。

そのためには、みんなが関心を持ち、協力しながら整備を続けることが必要ですが、地域によっては高齢化等により維持管理が難しいところもあると思います。

そこで提案です。バッファゾーンの維持活動の大切さを知ってもらうため、地域の人だけでなく、地域外の人也能参加できるバッファゾーンの整備体験や、そのなかで伐採した木を使って、文房具や小物を作る木工体験などの取組を支援してはどうでしょうか。

実際に体験することで、鳥獣被害対策の重要性や自然環境について学ぶ機会になると思います。そして、地域の人だけでなく地域外の人にも関心を持ってもらうことで、今後の維持活動の参加や協力も広がると思います。

このような取組で人も動物も安心して過ごせる広島県になればいいなと思います。

答弁（農林水産局長）

3つ目の提案の「鳥獣被害対策」についてお答えします。

県内の里山林では、放置され、藪になった箇所がイノシシなどの動物の隠れ場となり、人里に出没して作物を荒らすほか、人に怪我をさせたりすることから、隠れ場をなくすバッファゾーンの整備が重要であると考えており、地域の住民団体による整備を支援しているところです。

しかしながら、地域の人口減少や高齢化の影響により、バッファゾーンの整備後に藪を定期的に刈ったり伸びてきた枝を伐採するなどの継続した管理が難しくなってきました。

このような課題を解決するため、伐採した木を利用した薪割り大会など森林を活用した体験活動を通じて、地域外から人を呼び込み、森林保全活動の担い手を確保したいと考えている地域もあります。

今回ご提案いただきました内容は、バッファゾーンの維持管理に有効であると考えられることから、地域外の人能参加できる枝の伐採体験や小物を作る木工体験、

また、鳥獣被害対策を学ぶ機会の創出など、検討すべきアイデアとして市町に紹介

していきたいと考えています。

引き続き、里山の生活環境を守るため、繁茂した木の間引きや竹林の伐採などの森林保全活動を推進し、山地災害の防止や、水源かん養、生物多様性の保全といった、森林の持つ公益的機能が発揮される健全な姿で次世代の皆様に繋いでいきます。